五更

へ 5
5669

門 へ5
號 5669
巻

明治十年四月新鐫

篝櫻集

教林盟社編

錦雲

昭和十九年三月 故小田寿吉氏長男友太郎氏寄贈

松月

為

明治十年春日
正二位經季書

花櫻集

何処となく咲にほひけり深山の花　　㴱荒

遅きさくら花のまさん春の山　　堅玉

さきてちるで行燈桜し花日和　　雲暉

口ずさみ来つる往来輝して花のかげ　　月彦

世まり来る花の使やきみのかふ　　禾晩

花の人花のにほひきまかなし　　韓雄

たしかに見出し男人屋この帆　　梅年

ゆるし松の月に眺やはつさくら　永機

何処にも都の春や花の雲　謝徳

ゑがゐまたはしるは花や紙乃花　雪笠

ちらちらと風にあはしなりそのうちと　冨水

峯の雨しばし花のさくらかな　林甫

雨ての朝たんとおるや花乃雲　三千之

ふた葉より松蔭あるよ山さくら　千兮

猶ふむ藤まてはりて山深く居　青笠

嬉しさは花もころなり越入　柏葉

一木たくさ見ききる花やうき世の客　随宜

朝あけさいさをふや梅たる桜かな　信濃 五蔦

字用とりと花蔭城るか蓑乃空　花狂女

明とまあるく晴しれし花さかり　西京 柞舎

雪がれ木て花さへ尽し山嵐　下野 其公

見渡さりと春の花や二度流　上野 頑水

明さたくまでさ刈ね日や花七日　文海

天金竹

夕月業なれば咲くさくらかの那　武蔵 完隣

とく咲て人まつ川のはや山桜　横濱　雲外

东雲や雲のうかるし花の上　武蔵　柏朗

道廣し何處まて花の新樹き　夢雨

徐々崇降る中尊て見えれ花の宮　上野　逸学

待ちらとさへ花の在て立川桜　唯心

篝周や法の生る門に崇花ぞ木　下野　巽絲

朝雲の桜て通ふや峯乃花　常陸　东雲

ちるさしも花ま渓出む小雨の花　丈跡

何ら付かき春を待まれて山桜　信濃　訥収

理るなり　たゝみやさしき稀の衣　肯外

是非との人とて老ぞ花桜　如泉

やかうちを爾ならみ花の宮　知漢

人愛の里をそ何れ古川さくら　世外

日の暮る谷のゆとりある桜の邦　甲斐　可猜

本会せて去のまきかひや古川桜　玉芸

神の在るやすし家日和や花さかり　駿河　九米

花をりて在生そて掃る花の道　遠江　十湖

嵩寺して宮の清きく桜の邦　素康

桜のみ咲て落日のまだ遅し　象谷
朝起し花まだ咲や山の雲　三河 蓮宇
手に袖裳かけて見るさよ花の時　雨丘
一本残る夕陽花やあらし山　露光
静さに花は松とくらし朝ん　尾張 士前
花は散けて暮ゆく色夕陽日　木兎
明方のや花乃隙あり木陰　破雨
見尽しゝ人地をせめて花一日　静雯
去ていやしも添ふなり桜皮膏　流翠

暮る花の外で薹なし石たゝみ　吉池
夕朝と又なりしむ花見白　美濃 三楓
咲ちるや餅の木花と思ふほど　竹茜
日の暮るまでしもて雲の谷乃花　露生
雨まちは海をうつし花のうち　伊勢 閑貴
薄紅くまたく桜娘なりむ乃露　摂津 卓志
花ちるや人去り事をも水の音　淡路 洋々
細道に筆さしなり今丘の家　尚女
明あまりしきはみて見にさくら　芳洲

浴ふ日しくれるや筏にちる桜　播磨　青山

俎板の青表はなして張本の夕かな　備前　凉呼

庵子花や佛事をむかしまで　芦風

大和路やあとさきかくる花の雲　備後　梨云

人去らぬ雨をしきりや花の宿　翠敲

暖るや花よりつゞえて鶏の聲　松影

笑きそ降る音のしてむしの雪　寛良

顔をさくら鉋もたれ松ちるや　李東

峯仏ひとる道表ある桜の下　雨地

星も稲の人ともさくらさへたち迎へ来　安藝　翠石

花おとやとしくさかのゝ飛鳥山　因幡　在波

迎ふるきとてちるゝ表柳けに桜東　巴大

大路行佛事たやしむさかり　年蔦

見る人もふつる嘆きや色の花　三芝

ひし隔るし散る花さしぬる友飛　出雲　曲川

初花に閑ひより柳にも三飛ぶ机　方月

影しる落ちて於生はさくらも花子風　肥前　山畝

花のまや只もうき桜さ月の七夕　日向　一朗

花はみな草にも見ゆる夜あかり　文仁

（日向）漏りて猫たしこの寄り夜あかり　流卮

大寺やこのまゝ桜の昭る桜かな　竹人

たしかなる鐘に先立つ一生さくら　野歩

昭て日のさしけり根ある桜かな　寄思

我植し花は老いし里のかり　一峯

咲きし跡はさゝ花の下陰おほう常理　眉丈

（羽後）花の寄や流れより上る人の声　嘉山

出よの陰まで出ぬこゝろやら花ざかり　清梧

流れけり水素梯子や花の陰　琴臺

かゝしとも思ひて来たる蝶かな　恕余

咲わらふ花は雨夜の蝶の宿　鴉法

捨て来た木の実も鳥や鳥立つ　良和

（越後）花の中に住みて見る妻子哉　玄葉

（越中）雨ながら能のある桜かな　百鐘

藤の上見る袖はまだしきゆかし　椿堂

出てみし月のない桶や見さくら　可静

あまえの寄まうもうて桜　蓋邪

待宵のちらぬを花にかゝる桜かな　　佐渡　斧冊

月の出てまたくまなき花の雲　　子来

咲花よ宗祇のましや残さし　　北交

霞まで水葉こそりや花の市　　越中　嵐嬉

梅道や轍をうち花吹　　之留

人の来てうしろに山さくら庭　　篠清

おしと花もの割も花曇り　　石巣

春あさと数寄屋梅花の那　　眉丈

又ともに日毎春の花の雪よけ　　如之

大空よ雨の花になる木のまゝ哉　　竹水

錦着よ喜ぶ声なり花の中　　梅閣

くもり人素顔のうへの花の春　　莒来

たそかれ花よの白き桜の庭　　蘇交

満月の戸より花散る桜の那　　乙外

幾度来て小袖きる女の道　　きよ女

桜きくや花に吹の夜の雪　　董甫

花よ来てあやかし浪花の中　　眉吉

春風の花にさそはれ海　　西巣

咲揃て花なる木蔭ありぬ桜哉　加賀 桂光

名木寺花なる上の山　芳居

花ちるゝさやり見えて下掃く桜哉　鬼外

降りしきりてそよ花を含りや花の雨　花孝

ちるもんを碧りて見せし花七日　岩代 而美

ゆく人の傘に雲花の下道　一洒

菜の花のちりて暮や信夫の山桜　吾山

花曇や菜の花やりと花の下　蓮宝

出る月含て花精ゆかし花の容　子往

咲まゝは雲とも見えてし花の雲　陸中 湊交

さゝ波のよるも絶えてちらし桜かな　陸奥 此一

夕ざれてさら樺ゝ雲や嶺の花　渡島 一鼎

水清めして山桜色さへうら哉　後志 右井

明まむ白雲や花の一木桜　渡島 湧風

言ひ雨て押せ花の花の那　後志 一貌

打たるゝ人の事に咲ゆく人なし　東京 素石

人業まて出ねるまで雲の花　野年

吉野そらるる人ありし花さかり　五体

まし星の梢のつゞきや朝さくら　　大雪

登るほど雲ちかし花見てつまより　　雪松

雲みてまた別れもせわしき初桜　　詩竹

花咲て其の声も謡ひ初めぬ　　季流

風鈴の松の間うらで花の雲　　喜山

汁なべや香籠の花の宿　　若芝

入まてろ雲桜は日和の桜の雨　　武蔵　萎兄

花咲て川をも入のとゞきかな　　竹二

咲みちて来る水暮しや朝桜　　梅里

大門花やむかし恋ひしの句の匂ひ　　酉山

花の色きらくゆきて座りぬかな　　保義

御殿里花に体ありぬる卯の夜　　芦水

寄や真垣ふ来てあくる花の宿　　上野　為流

花のもとの橘の維ぶや花もなし来　　乙騒

経々や花の術の人ともなり　　宗衣

二人と雲来まして轟かし山桜　　祭白

きのふけり花を咲す花の来　　下野　蔵桂

咲乃松や雨あと閑なり木の下　　思水

ちる桜ふみ来山の足あとかな　上総　他山
影の寄きらんまとゆる桜かの那　下総　李山
山さくら雁人の見る日を盛りかな　松島
初花やあかる嵐の跡ひらき　岩代　児川
葉まじりに同じく花の行日哉　葉史
従して雨を待ちに桜かな　月邨
名の残を伊勢ぬけ花の精かな　帰壹
縦にしや笠に雲のいる糸桜　乙己
大島の桜海のもとの雲　陸中　南濱

神風やさくらの峰の空にふれ　陸奥　素更
咲人の道の出にふれ花の下　鷲栄
雲となりて散りあひつる桜かな　芳吟
ほとゝぎすのさくら山のかゝり　渡島　湛山
暮かゝる嵐に峰の桜かの那　後志　可陽
影うつるの衣にさくらの頃　北鯤
見かへりて帰る目をたのむ山桜　濤白
行春の人に流れ岸の花の峰の李　羽後　峰風
取る木の下の付近の合の桜かな　可惜

風雲又寄来る事のまたの桜　水哉

引とめて出て咲くや峰の花　素泉

初花やさらに来てみる人もなし　蕊郷

咲く事も人に告けて散る桜この頃　羽前 也足

桜から人に告けてや落鐘かけ　越後 雲秀

神風や花吹くつの袖たもと　長瑯

花のあとまたも返り行く嵐山　佐渡 二保一女

かり初めて花さく宿の算の法　遠蓬

隠れても見え花咲くの陰に山　松雀

散る雲のこの朝より初桜　澗水

藤の寺や浦に下る花日雲　芭重

利根川や下る花の下流　越中 甚清

桜さくらや第一流の水の春　柔丈

花ちると花おちて来て桜散　鷲富

枝の先を朝霞たまるや花の宿　露松

逢桜さくとて山も深くなる　丁芳

花さくまでも花の名残や夕嵐　三形女

春のくもりよ花の色の雨　越後 梅遊

又来る春花見客ありやとは船　越中　一朗

更くに傾る松と思へは花乃宿　三掟

入相るんまゝ遠さなし花の君　旭枝

それ雲と定めてゆふの花見頃　丈渊

たけなるくらん勢る山桜の幸　吟水

あさらしき枯乃ミちやまけ揺　蔓林

咲ゆくや花隈山の花ゝしき　加賀　樹園

撫して余情松のけや花盛り　文器

灯もこのあふよ結戸守りて花を吹　梅跃

起きて松陰てのくてあつ江揺　因幡　忠莫

柳あと風のさはるは糸さくら　柘常

揺あるし揺と揺さく月日哉　柳泓

揺ありさくる花けゆく夕霞　伯耆　蓑外

持ちて持んまゝのせの花ともこの都　蒼俊

和ゝきの付をり花の咲揺まり　安糸

雨起と日花天七日乃日和この都　出雲　喜樹

吹たゝ込て花く廃るや起まり雲　淺月

開ゆんとまる花南き精この礼　石見　静雄

三坂路や不尽へかけての花白雲　甲斐　菜國
散さくらうつゝやまよひ表庭　信濃　意篠
西藤営隆きれの雪くもの邦　菜年
かゝる花の雲流るゝの峯かな　月休
本の木立見付ハ潤ふ也る櫻　雲底
見上てあかぬ花も峯櫻の手や花　駿河　文石
もらひ藤の足をと枝しや初さくら庭　遠江　餅畫
下草藩の花に一もちる枝の　知須
ときし火や桜見ちら花の風　木潤

みちの山付ハ見渡して若葉山　三河　半樵
あけぼのゝかゝりきよく見て山櫻　長支
花ふみ風よ其雲ふりし枝の路　古峯
あかつき理をみて見ぬ山さくら　揚丸
あさ日の花とかく散ゆく山花遠　尾張　石芝
秋の名やゝはひ見ての雲の麓　相海
見あらし枝は庭雲をかへ花の花　英斎
見えてもよくて花さき見て朝の花　未笛
九重の花や帰りて香のかをる　半山

日の影もつんぼきの響を桜かな　阿兮
和らこの花の戯きぞ風の小蝶　三木
雨去まで来て降きぞ花の匂ひ楽　斉溪
咲けばまだ咲けばまだ[illegible]花盛　伊勢　白水
花に来て[illegible]も杉ならし来たり　丹波　波聲
霞ほどで春の来まりや我まさかる　在大坂　松塢
咲き出も花はうきたてころの雁　摂津　宇長
見る人の叢花も樵猶ぞ下り　淡路　其儁
東雲や中ぞ見かくる峯の花　藍溪

浮さして松明中よの花そうろうあらば　阿波　為雲
家ふうしあら哉生ても付し花の雲　備後　逸水
山鳩や花より打つ鐘えちり　[illegible]露
志入りし人ぞ法鐘の鐘や八重桜　松聴
家[illegible]花の木乃香れ　柳窓
留守の戸や筆を入れね花見吹　安藝　雨川
夕霧や花の何とうの落花かな　陳年
見てさえりの春暮うや山桜　梅江女
遠山を達花見の夜とし花の下　且思

明方の白きうちより桜あり花明り　肥前 梅居
さかりまで来て皆いくるや小さ器　西海
流れ行く水にも花のうかりけり　枝月
人ごとに美しさを見せる花ざかり　織女
雨来る雨にあふや桜の花の色　桂路
花の旅のたよりに来ぬ流れの東　巴月
仏にもこぼるる人ありて門桜　起涛
送りまの花ま桜く山桜のある　筑後 鶯渕
庫にて庵る家まも出む桜もの門　文芝

毎日の空に待ちかね桜の花　宗有
隣あくとく見て御門山さくら　杉雨
桜の下に斜めにかかる月かな　柳波
鉄の橋も花まさかりを出る哉　因幡 袖丸
花の名や知らぬ宿もの一日哉　東京 西修
人去りてたゞにむしろの桜かな　古山
明け来るねずみ種まく露に桜　柳画
花の影きえて知らぬ花の夢の花　武蔵 竹窓
桜さくや日毎に数かわらせん　桃居

拗まで水の音あらくと花の奥　東京　四交

山里や田のなき雲にまて主きくら　古麦

咲く迄で皆水に散く仍く紅の散　武蔵　見岱

雲よまで見とおろあらんぬ紅の雲　鳳眠

朝桜の雲と降ほくちりよくり　菊枝

山里やさくらかゞ朝の明初る　岡山

影もなくあちらにまるあき花の桜　一晴

よしさくらは風をたのまんちるさくら　上総　蓁我

永き日を気につかいて花見かな　上野　一楽

ちる花やたなきく雨あゝる風上す　案古

花まてゝの咲てみてぞ咲る日とかな　梅岳

桜狩りして日もて暮れ初の月　笑致

思ふよ告ありて早し散る橋　白圃

寿ず咲して人ま笑ひ花見かな　鳳業

初花や落のあさる山の端　良笛

雛よ鶯の初くや花乃中　奥岳

旬日降よ雛そ見て花よ風　東林

きとくさんる花のつゝかる暑かな　路外

さし出や花よ明るき京の向
ともの字に夏を結ふる葛も多
呂か舟よ咲つゝさしかへす蝶乃花
笠の紐とく月行衣に花雲吹
鶯啼て山に桜のさかりか那
咲花のくらき構へなり水の音
有てこそ花も盛葉を札山櫻
何処とも動の松白なり花さかり
あふ人にうち合ふ白や花乃山

苑木
駿河 湛水
美濃 藍庭
播磨 月府
西京 沿守
伯耆 清雅
因幡 楳睛
栄古
風外

餞やり花あふしき晴くもり
さかしさの花に霞ぞや酒のうえ
見よ来て見て佳む花ぞ人この郷
只誰とも見ても花も言ふ桜
あらはしく見るや花の親子連
水にふく新しく春のあかりこの杯
ゆく川たりと月の下くもり花の上
立隠を見る来て見まさかり
君の代や花に遊ぶ花にちなむ

日向 多牙
吾田
梧雲
林烏
可峯
坐有
桃佐
李峰
鳳栖

水音やさてしめりくる花の陰　荷水

あたりまて吹ぬ風あり花の中　里径

咲初しよし野まてさへ夜の花　緑

暮る日を含むさくら乃雫かな　一々

紙幟出して見えけり麦の穂一の郷　肥前　秋兆

躑躅の雪花の下行様下一の郷　兜暁

あしたさて麦の上まで旭染　周防　松舎

ちる方へ明けて行桜乃花　肥前　野芝

木の下て志のく花見むしの音　花の女

来たけと船登せけり春の中　雲鷹

松山暮明る葉のさかりかな　花交

春雨の旅そして咲く雉　谷雪

春川花や蝶より蝶の先走り　霞梅

花の雲や旭輝く宿より　洪圭

香乃春枝の先にちる桜かな　祥圃

菜の花のせの往きて久しき桜の郷　推君

花のあや花明のくまよ春多　三千秋

山家まて夕寒かくるさくら　彦人

思ひ勝て花待ちける結句かな　梅寿

搗巾の影のうちたる庇の宿　菜如

とちらりかちらり盛りまし人花を待　舛一

訪ふとふ者はしら付ゑり花盛ん船　白翁

態々雨の降て続きけり初ざくら　鰭成

茂るとて衰えしもの散花の多る　日向　柾

岩にかゝる水も桜の中らひの飛　東

寂しき物も来る風ある初桜　肥前　次女

初花や其まゝの下に飛んで来り　多雨

船遠く来る追風とまりて花見かな　桃里

梢の手すゝきらずに来る東　兔素

谷あひも夜より白のとく桜の卯　月泉

身はまさに風まち桜よさくらかな　志暁

八重桜ふところ出来て花見哉　我情

新しく新しく市夕日のちる桜かな　志蜜

花見人のうし見ひかる落花の饅　波月

春寺雲端くく花のさつかな　志道

日暮一夢頃く花見人の卯　笹年

おくれ来て嵐その日くの桜哉　枝洞

捨てもよし一日桜の座敷かり　咀芝

花に来る人の口坂を行　文芝

山寺や花りきれを運さくる　楽山

人通りにそれ志ぬ茶店あり　可翠

声々に暖かき宮居のかけ　李居

桜咲けはまたかならす騒しさ　仙子

座の花来待て雇ひ出賃かな　鶴堂

我桜咲ても余所の花見かな　史笳

信濃

吹きぬけて山路嵐の宿さかり　武良

降りもしらぬ登る山花乃山　子磨

まだしらぬ新たな苔か桜　銀蛍

ちるる花の増しき山小咲なき　孫齋

若鮎のちよと見る花の中　希富

おもえはちりぬる花の陰　素池

生捕りやく桜の花の陰　潭洲

春て遊ふ羽織や花の庭　方昕

山路来て出の聞き桜の所　守雄

夜ざくらや晴ても月の花曇　田柳

命毛も乙しき岸のあらしや初桜　抱沙

初桜きのふまでとは知らぬ秋　白雲

花にまた月つゝ心晴る夜すがら　一菱

散るの音さそふ書似たる桜　越後　一秀

思ふさ地に落して見し桜の花　翠嵐

山川に沈む流れをや落る花　羽後　山耕

咲きあきて見ても今やまた来ぬ桜

春くれてかしこみて舟遊ぶさくらかな　安雲

散りもしむ花のさくらの枝移り　節之

鶯新や風来さくらの宿に咲　宜規

花に月花もろて落ても散りに名　陸前　強松

夕霧や花の音しら枝の花　海玉

扇子にて来ぬけしき花の人に所　下総　元柳

花に桜遠の日にいけたる色にて　華君

菜の花て姥の何見この照りの桜散　川華

花を見て風にて垣下へ吹きこし　菜雨

まで見てもさくらの庭にあしもなし　王枝

よく雲のちりをさきまつ桜かな
見さへ崇能の山をめくりて花の菴
今曇木の陰して〳〵さくら哉
霞まて残して花の明まで
花よりて明渡るのもさかり哉
香ぬるし桜そさく身を免れ
麦むし鈍風吹て吉野桜
花の色のさきで生ふく白
陸から川まきれ花雲かな

加賀 一二
越後 杉月
羽後 壽尾
陸中 也壯
上総 茅山
陸中 鳴雲
東京 雪乢
羽後 賢宜
玉翁

今朝捨てさうして花の雨
暁して花開きて郭公
行くるしきと返しきて花の山
待より寺むし淋しちる桜
天地崇和して花のさかりかな
初ら程出かけて去るや花の頃
八重山や雲のもよき花の雲
花見風かさく聞て庭のかり
人去て花はまだるや夕かな

武蔵 雲川
上総 梯巣
備前 菊尼女
上野 玄石
泡菱
牛歩
萬古
雲遊
如雲

おちる花を踏て峰寺の鐘さく　雲峰
下総
引きとめし車に業ちる桜かな　静翁
手をつなぐ程まゐゆき桜かな　玉光
市町の横丁に見る桜かな　西冬
ちるぞ夕暮のつらね家の桜かな　覚之
さかりの時業を見るや夢の陰　扇風
羽前
花さかり雨ありしの樺もやれ　五有
家郷まても送りて見る桜哉　金英
門隠る人の樺も花見の帰　梅風

雲ちるしるを掃もん樋また桜　未足
陸奥
みえるもちてを夜のよして山さくら　静山
分け入る奥の閑かる深山かな　祇瓢
つくえ初ていさむ野に山の花　狭乃
葉かくる日業ちるや花の色　漁舟
晴水も入たき庭のさくらの枝　稲風
見そむる夜こそきみが見るや桜かな　湾保
遠ま行つくせん雑ま信るん初桜　涼材
家山をくるく照らす月に雁の花　且来

老木にも枝垂る花の地桜かな　陸奥　童岐

尋ぬるを問ふて出て居る花の奈良　文雅

紅に照りあふ色や湊の部　呂川

花の裳よくの下もし夜やの門もり　渡島　百花

雪もくまて月に乗り花の上　慧山

雨の錦りと宿もく花の旭の影　梅信

花の表の灯や夜さ分の人は休く　可然

雲と地を分けて落る桜かな　旭

絢爛の日裳をしかけきさへん哉　各羽

西東鳥も多くや花の雲　陸中　尺路

峯の雲ちらして桜の春の部　渡島　八木

鶯風の吹きしまりて花暑雲ヵ　素心

夕の花みて晴るて月にの桜かの影　巴濤

春風や花の世となる日の出哉　東京　栗窓

松桜そ並んで花の盛かな　松濤

花るや見てきそのの桜まきの春　後志　甚友

くるまの音も花見返る遊びかな　點々

花咲てちらちらと賑の春のかな　馬角

老木にも枝ありさよの地桜かな　陸奥　童岐

弓ぬりを問ふて堂に居る花らん哉　文雅

知らぬ身をあらはして隠れの花も人の郷　弓川

花業よく二の鳥さし姿や二河さくら　百花

やまくもに月さかりの花乃上　渡島　慈山

みん路りと實をく花の旭の形　梅信

花の人の魚のかや知らさぬの人はく　可然

出ても地をもあらかれて花ある桜かな　旭

約束の日業ともかりき花らん哉　吾羽

西東今夕たなや花乃雲　陸中　尺路

峯の雲ちるまで桜乃春の郷　渡島　八木

松風の吹きまして花の曇り　素心

のどかなるや晴て月桜との形　巴涛

夜明や花の世とて日の恵　東京　栗窓

松桜に並んで花のさかりかな　石狩　松涛

花るや来ぬの桜さきみよ代　後志　其友

くもりの夜も出て浅きさくら遊びかな　鮎々

花咲てちるまで僕の有かな　馬角

花筏や硯の海乃かゝり船　李遊
まさきを見届て雲の所さし　竹杢
鶯の来て見ん所の花の下待つ哉　一三之
雛の日や清水の下る杼乃机　藤宗
蓑より墨も雲の日和の哉　紙月
雨の内さきて行く侍花に月　石狩　玉光
花待や去年眺め見よ吉野山　継木
月や梅の枝一本ありて花の中　介子
人の道はここの年もとの戦きたれ　桁水

誰ぞまつと来たやまた来ぬ初桜　淞东
春の風の後に聞く出る鶯の雪　雷鳴
花の中に出かけて見れば人多し　渡島　成実
柳花や山よりもちの暮れ　東京　乙雄
鶯鳴て移る野待ん雪の雪　蒼富
蓑清水待の数見る桜　桂花
雨かさも風や日ぞ見えし七日　山月
柳花や梅咲てより七日　竹甫
春日雲や雲紫咲く道　竹秀

さくまりや三絃降る春の嵐　木變

連ては妻紙條もし桜の那　晋紅

白妙や水田く乃花の光り　一詞

松さし降雨や峡のたへ花ねくを　芭堂

花咲てさえや葉乃小家まで　知雪

松風の雲吹返て吉川桜　洋雲

梅散て結ひさゝかし歸去る　佳水

吉川気や人の軒端と咲出れ　二莫

出鏡の門木部と木のさくらかな　东松

待兼や初ふらふ一気にはる　漢鉏

渕と見れ雉鳴ちや吉川流れ庭　仙哥

暑く行て咲くその如して梓風　楊溪

立つたる人や止まる花の山　老山

雨風の絶えまもその花見かな　甚紅

蒲焼を切る男よ春の面　畯生

咲おる毛桜の那　甘美

さし出て春風まさかの花の雲　武藏　楓雲

鶯の譲く本立陽て夜の月　添堤

花の雲人にあふてはなかりけり　圭安

境内の茶店を広く桜かな　田成

足軽し花見ありきの戻りがけ　武正

木のもとに人来て花の散りけり　羽山

咲の出る雲かからぬや花さかり　芳補

手を組し椿の木末や姥桜　若州　北海

雀篭に蓑干しかけて新桜　斑芽

海の上まで漕行舟や花ぐもり　其峰

花の雲浴て遊ぶや都鳥　万歩雄

水まさる花の色から都かな　墨英

数ならで暮れぬる川の桜かな　笹遊

音よせて来て花の散る夜かな　信濃　雨塘

松の雨乃跡見晴て志賀の浦　松園

花咲出て何処も人の道ありけり　不二丸

朝夕の枝もたせけり木の花　上野　笠山

咲き揃ふ人も落ちけや花の雲　下野　翠雄

桜よ人を並べて通ふや吉野山　下総　蛙山

ちらちらと散る桜の花　千泉

影ふまぬくらさ花の蔭かな　季陵

明遠や杉から雲ある花の雪　在栃木　友松

蔭つたふ蔭ある日まてつくるさくらかな　蓼義

面影て花の蔭る日も朱まく　下野　如川

さくらさくら出入の多き茅家かな　常陸　仲義

咲やよと雫乃屑て影の花　花友

日のうちの月やおほく櫻かな　寒亮

桜木て雲の終りて流るむや峯の花　信濃　蔦石

雨雲や元て誅の花あかり　田月

當せまりかくれの杉影や窓の前　獨醒

人影や花雲に座せし伏見かな　休兎

来年そまた花咲かなんと夕の柳櫻　碧風

花ある木振る窓の実かな　越後　愛鶴

嘉那花白和風　獲適

杉産てさき伐株や花の山　兎集

杉の雨や花の利生や薫かな　志朗

花乾て戻るや雲た近き時　可肖

夢なれ雲深ふかき夜の雪　甲斐　如陸

花まつりや甘茶も桜しあふ瓢　葵玄

甲斐
[illegible]や松は見えて初さくら　月丘

遊ぶ水も花流す影や花の雲　寸松

木深き夕しらき風吹く桜ら卯　哉也

影もしき桜の匂ひや花々　山菜

松寒き来の中より暮ぬ桜の木　一雅

駿河
花見えて知らぬ滝ふくや七曲り　亀波

来て見れば緑も残る初桜　梅史

[illegible]の花あるとあふ桜かな　法成

年々に見て来ぬ梢のあるか桜　粂畊

都出て花の月見て来りけり　素粒

遠江
花洞に出て岩影雲ぬ花の網　[illegible]

岩の鼻千年の色松山の初桜　玉奏

都出て見た霞に山渡る鹿　甘谷

江の月さりもたれも浅花の雲　菫交

河ある程まこの海で夕さくら　江室

花咲くる人知るも来ぬ山桜　逸義

人まれに経て松かけて花の陰　守孝

杉形に風そよぎて夕桜　月壺
花ちるや庭のあるじと来たる　碎成
舩ゆるや花乃後日の出来ごゝろ　三蘆
春のくさ隈の手ならさくらかな　省花
さくらかな桜の人生まれて咲きみだれ　緑補
咲きて行く桜の潔よし花に鐘　芦堂
初花や咲けるを風の雑木山　氣来
菜さくや佐橋のまる楪川　栁甫
出来ましてあや宗く花のまた咲きに　玉浦

春の日は花や咲く風流の雲迄まで　竹堂
日高する鶴に流るしきびの郭　蜂心
能勝や花けまし身をしき岸の花　洋々
雲と宿まで今日咲かし花の亀　嵐生
寝るとして花にまじる稀草　樗風
碎さえに桜の人来月柳の花　翠塢
初花や山の月見る書物もなし　三河　拙流
花に旭のちるかりのる山鶉紫　尚朴
摘みつける石のぬくみや花の陰　五息

鉦うけや人に葉桜も哀しき　素鱗

又ゆきと秋花清く照らす也　普哉

浸さりて坂残りて花のんき　李川

暑さと葉つんにまくしきの富士　雪池

初もとこてきにつん深のかさ雲　雨室

をとくかうく陸風でちし葉の花　百嵐

おうし雲の郷しをるや花乃上　荷庵

ある販もさんはなのうえもへ　雅風

あう銀よう月に清む風や花のかし　清童

尾張

篝火や月影さそふさくらかな　松雲

行まで桜まで小雨しの柳かな　為遊

あさてきまで月ゆふの夜の雲　鷲義

嵐出て山あらし桜この花　甚朴

出来まで花れ日本の花ゆかし　晴園

かと空やさをるに桜した桜　蓬道

阿しゆまでまゆて花のは雲　自笑

さし渡く枝や雨きん花の影　四方

りそう外乃この花もちる桜この花　我貫

月影のとゞきしなり草の中
降る白岩梓てぬしきね揺葉
流れさへもたおく瀬の夢の聊
飯月の篝て達の左門さへ宿
分け入るは書て静なる草の奥
御堂門て固し花のこる月へ
春雨やたみ歌て算字の水もひ
飯組の末る日置ありて岩の花
風まちて晴るさくらの雅

古杉
其進
梅圃
背楽
少年
是白
六朗
甚雲
林花
中庸

老ふく春寝ひまの乃ゆり中一路
味のかやらに松喚さまし糸さし分
花しく雲分てたゝ一つの梁み日の雅
一色の日きえしうきをかぬかさのり
私しつの茶草もむ月やもおもきと
松とくの志ぬかなぬ繊や蔵へ
菊たてしきもや文ちさしいさし
様この物松を門この人を飯ゆくえ
明るの日もよしとて尽すかさぬ

麦花
如水
車交
悠哉
丁思
月孫
嵩古
洞門
五階

退りてさへまたかへる波をしら
織くとして日の影のさすかな
おくるとしつゝ手毎てまて書き桜哉
戸障子を引かへて筆安き宿の宿
出おりハ花をうつる里まであかり
ふんまさしき山路を違ふとも
さ河朝日まて立添ふや水鯛り
まる犬乃人をまつや山彩りけれ
ちる花や松の浦まてちる乃春

立意
四馬
呂長
既芳
吉甫
杜菱
伊勢 棠溪
風之
丹波 杉嶋

粋なてふつくる秋しるや萩さかり
僅かの雲の絲あやなる清水哉
峠あらころ見せまて清水乃月
田はて夜を後と花蓋し雨の花
夕顔や木の葉乃ちるを照りよう
日をまた向て見あるも霞あり山桜
卯月川中の桜一本よ向河岸
いさや月んちるの際明くのゆ
落ち葉をもき絵置くる花の山

大坂 渓美
摂津 如悠
紀伊 汀月
淡路 晩香
周策
素至
蹊三
耳外
音井

ちるまでは来る便となりぬ一重桜　阿波 竟年

おほろきて物親しけや花と水　抱清

花ふゝき数多の風を腰に埋むと　伊豫 東窓

見晴る雲まさし花盛り　備前 天籟

咲ちりも都の流るゝ八重桜　其石

影涼きをくて有しのまゝ桜の間　氣條

ちる花は雨の弟子なりけり　松遅

ひとゝ笠比丘尼して峯の花　芦川

山の風吹ゆくの花桜の咲に起　蒼頼

花の色はる桜で雲をあとのなりけり　世香

遠くたる川ぞのさくれはもく露ぞ　松霧

神祇山みて　備後 法古

蒔枝の風和らけるさくらの形　沽石

底ひかる水の清さや花の陰　暁村

たなひく雲も清くて花の香来なり　木老

何となき紙屋や花の中　工琬

宿のりてんのまゝつゝ花見の家

路ゝ月清し静かにたまさくらん　多賀女

卯の花まだあきと見し晴かな　暁蛙

曉や花より低き山の雲　丹英

暮るゝとも成りて雲ある山ざかり　可有

誰かけふもまた後の花の鐘かな　喬鳥

吹風や又しきなみの条桜　来石

藪より来て鶯しばし来まぎかな　霧吹

折れたくんで不ころや山ほうら　東水

鶯の声やさて埋もれて夜寒さ　稲里

枝晴れて通りよかりや花と水　蕉笠

目の出してまだあきとや花の空　蘇保

折もしかけて行くぞ山菜の花を　楮右

枝清くや花の夕路をかへり　芝堂

笠ちるく船又見ゆるや花の山　草楽

折そまでや月夜てもの頃にかな　松里

花の浪の独りの花さかり　呉雪

浴やりと風もある花の陰　浴葉

又遠くや花の庭先の花の暮　里爽

花くもりして惟なり花の空　曉花

山をまく花ねや花よ人の數　露荻（安藝）
人多きてまだ咲桜の杯　白猪
昨日より花ゆかりなしとし松　棠園
陰をまつ雲より桜の宴かな　露翠
水清き和らく花の下の色かな　桂玉
枝つたふ水に流れて花の中　杏村
庭もせの清き合ひて秋さへ　雪庭
朝情や花生の風も花曇り　白也
記も来る出来る花見や花見哉　元之

澄神水の汁も散るさくら　接竹
鶯もまく雨後も花の香り　升山
花の中出て景花若り路の日和　本士
旅路ね乙鶴や花の一目哉　由池
清き若葉も只せん花一本　梅谿
花一本中なして花の那　左乙
目乃肥て錦花のあまき桜かな　丹頂
戸くるまで花の雨も忘れて花の庵　竹子
花の風さくら静まって人なり　乳口

礫除や茨くさいして寺小僧　由和

涌出の仮名ちらす夕河はらく庭　風月

人去川で目に詰まる梅の那　山口県　溢寧

人来来れも散る雨の花　筑後　花鶯

ぬけれの(や)雪のたまり(む)の上　松語

鉄経ま(う)れしや(春)の招安(皮)　古水

住の里ま里ふ雑木や(花)雲り　出雲　璽柳

今の空乃(色)ま(た)花の枝　芋村

阪日ま(う)ま(も)(た)(や)き梅一の脈　一松

義経や風(き)の(この)れし(花)雲　心水

人たえの(ま)(き)(て)(の)(ゆ)く梅(か)　錦石

日ま(向)ふさ(て)(か)雨の(ま)(か)(奉)　秀甚

(ま)(花)(き)日(の)(け)ま(ま)(ゆ)(ぬ)(色)さかり　桃川

(野)の花(桜)(き)雲ま(向)(色)(ゆ)(り)　伯耆　亀翠

花の(櫻)(ゆ)(る)人の(ゆ)(て)(廃)(る)(花)　冬(よ)し

(色)さくや(月)(る)(ま)(花)の(水)(し)　十二才　とよめ

(網)(む)(ま)(常)(廃)一の(花)(き)の(さ)(の)(り)一の(脈)　野樓

(情)ま(色)(り)(ま)(ゆ)(か)(牛)(半)(常)ハ(か)(き)桜　浜鶴

日の出迄や花ちる人の門まで　そ　三守
春のちく風はきく有り秋　一邑
たそかれに朶にしきや花に鳴ずも　其人
咲余るみ仙桜あり垣のそら　東丈
明るまで雪ふり込や寺の檣　二峯
衣きのうも晴る花の山きき　松渓
ともに縁して明けや花と水　秀茫
菜もに明て居る室り花の奥　柳青
花盛り菜をさそ亡日の名の足　雨芭

春雨に雲は晴て日もすて花ちる　予李
山の寺誰る家とも聞こゆる　静雨
降つもる花とも見よ夜門や花の宿　道生
おもうて落葉の山の桜かな　鉄窓
花候や時雨月また人の来る　規水
因幡
夢のけて一本の花さき桜の形　雨静
越中
ちり際よ来て降るる夜の雨　可由
初門そもそも花の堤をすす水　桂下
明る鐘月影も門むや花曇　漁遊

遠里へかゝる手繋きそろふ桜　國遊

花の木挽て来たる嬉しさや　素梁

そゝくよ花の盛りに流れけり　東湊

咲さくや雨白くもの起きて行　东江

小硯の乾きやすさや花日和　蒼室

あつらしき揚をかくして花乃んけり　氷清

咲く花の盛り消るや日和雲　呈遊

咲揃ふ花盛りしや朝と夕　元寿

朝ぼらけ聞えて起のし家の奥　可参

朝川かたへ落花の人香なし花筆　与嶂

艶な女のうきかけや戦あかし　芳園

花鳥に達し孫子に人まく縁　愛竹

花の雲もたち寄かく古郷　守朴

飽たるや三春に来る花の宿　下有

月影に来る花の集りけり　花鶴

春くれて花も日に隔つ揚柳　竹甫

花に礼して詠よや笠の紐　金舟

朝の神のみ添し流や山乃花　如什

近よれば雲隠れけり山さくら　稷鳳

並松や[illegible]岬のさくらの[illegible]　加琴

おもふ事ある人や桜に[illegible]　素流

思ひとまりけりて雲に[illegible]桜かな　如柳

[illegible]宇治の水や花筏　木公

[illegible]ねぶりて[illegible]　芳之

見物して[illegible]桜の[illegible]　柏舟

[illegible]の一服[illegible]　冬峰

[illegible]花の中　禾悦

[illegible]の桜の[illegible]　禾年

[illegible]花の奥　友壽

行る時名残して折るさくら[illegible]　公雨

[illegible]花[illegible]人や池の[illegible]　多香き

[illegible]扇の[illegible]や[illegible]の中　碩甫

[illegible]や[illegible]の花　鉋水

[illegible]揺　松逕

[illegible]風　桐栽

[illegible]夕桜　蒼玉

初音ある翁はしらむや花集　寿月

さく花や月影ちらす水の上　可常

初花や蝶の眠さへ時のまうち　求友

桜一木見る宿ちらし山桜　契星

ながめしひよ桜てみれば花の庭　甘扈

日のさしや花さく川花乃ゆく末　松鼎

ちる花や雨の乾きの後の枝うち　素桐

夕暮に鐘もあまりさくら桜の枝　梅山

春の日の鳥や寺あそ雲の色　芦夕

吉川のちりや谷の桜の一ふさかな　湘山

さよふくと花の口とく小風の那　巨川

さかねをちらす浅に仕舞て山さくら　花水

池水に影のある嵐や花乃雲　赤桔

やまとしくらしちるや一本の桜さく　花山

とちりへて花ちりちるの桜路　貴之

雲の浪染桂の花やちると撲　寿千

折惜しみしてみるきり宿の花　一宗

芝刈業松も花まで花の折　亀松

寄まてと云て事も事なき花の奥　雲窓

梓とはまた水にも流るゝ岸の花　禹民

弥生の人来る樽よや宮乃陰　素泉

けふ花をも聲かけて来る所との明ほの　玄丈

若さくや我も哀やゝの心音　芦水

夏をさき京あたりも流るゝや山桜　寿木

若盤木にゆまれしおもひに生きる　珠月

気の流をむかふるや花の〓木　石風

落ちかゝる夢に楽なくて桜かな　其蕙

葉曇く云ふ下しき茶や花の雨　僊夫

寄りも花をのせて来まるつ綫　曲山

去りくるのの船乃出おやちる桜　百世

義中寝て捨つる手の中に桜の形　野遊

若盤木乃津の喰ふとさくら哉　和翠

松松に請る京をきや初耕もなし　石甫

起て千宿識見むもの見て花の事　甘吟

松を敲き素の蝶に何ぞ京の花　清亭

歩たて一筆の記や芳野山　素環

咲花の川に浮んて散にけり　仙月
花妻又掃出す小庭の那　柳翠
寐て花を思ふ夕や雨の音　素岡
裸子の業程らしき花の下　布尺
照る松影詠めあり花の雲　波翠
咲てのこる葉も寐涼しく続く今　松亭
吉野山花の風情も朱よ今　好童
花ゆかん宿やとる業若葉なき都かな　米友
見て行の二度まてのなる桜かな　致哉

雲の上一際高し初さくら　瀾瀬
紫の中素彩る花の桜の影　松月
加賀
見ず河花の中是日も花の桜哉　汰仙
花の中花の中に雨も降の花　西亭
ちる日に人恩き散たる花盛　竹窩
あつき時の礼も河の花の中　兆丸
桜まて花も降る花桜の影　斎朗
のくに花雲の桜まき花の山桜　之芳
虫迄ひの薄暮も風き散さくら　鴎翠

立つ日の影へ寒く風もう流るゝ
ちゝ流や笹の葉毎も花ならし
掃よせて去年や各紙の色の藁
見る程く縁かけて根まく梅の花
雪解て出る仏性やさそふ鶯
人すゞみ花の蓋附ろ咲いつゝ
八重ざくら實傳ね流るゝ程この花
山陰や花あり家も灯ともし門
道の峯花河原の寒かりの花

蘭手
素文
喜台久
保臺
一京
公朴
李笑
嵩水
桑圃

松風のあまりま花のうねりかな
咲初る日をや墨ぞめの法くしろかな
谷の戸の小家新しき花さかり
此門華も照ず小影ぞあれ哉
振かへて流るゝ日永なす春の風
開き梅て河かり花さくの里
花の露このふうま桜や影すけ
春の影ゆくしるべくこたかよ宿
今さして今生の河辺花乃なん哉

良甚
有良
樹臺
桃灰
玉洲
子鳴
木達
緑伽
桃守

咲花を見にまかる日や銀屏風　巴笠
咲く〳〵志川のものをりの裏　蕙交
ちる花を雨に旅舞子雀の聲　淡水
袖は花散る雲雀山かし花の陰　坂谷
花の枝やあら縁の外の吉野紙　梅塢
さく花銭も古木で越得峠　唇風
人の来て見ん人なる一本の桜哉　紀園
山水のうまみに花の日和かな　雪丈
雲乃花ちるまま青あをさくら哉　斧硎

佐渡

花の桜下戸の口せまき庵かな　宋水
日暮ても猶花の中や一連桜　章雨
峯はさく川登りおはせて春浅かな　暁窓
居りて手を皆はとる迄や花の友　梅暁
ちる川花や鶏と秋は須りの俄様　香蕉
夕暮のひとつ傷ちる川や山さくら　暁兎
雲まりや桜は深くかさりける　牧之
礫乃見や浦に一際花くもり　花重
見浅山の出て清水歌くや夕桜　春塚

越後

華ちるとまで思ひね花や夕あらし　其翠

並ぶ市の中にまじりあり遅桜　墨古

名ごりまもちるや崩れて山ざくら　野雨

花七日みそかまかりて我有松葉　芸蒼

空まちよ我の志まりや芸の雲　吟風

待わびて我も深し遅ざくら　寶海

留守して我も雲雀吹し花盛　彰松

花に盤手活して分ね我の月　可笑如

新手新宅にして月の佳名の節　為吹

のどかさ日にかくやく花の匂ひかな　小涛

さかりさへ忘れて散るの桜哉　寿艸

見に来て花に飽て清水桜かな　好静

実まてなまじ花のまてる神の山　叢居

対岩に桜は一枝咲にけり　五国

桜よりそのよし我家の花火かな　知水

六より雨岩文刻し花のさかりかな　洗衣

時雨ぬ風のふきこむや夕嵐　鹿石

岸に吹て遊びなれけり桜の中　里三

売所に人の住あらん花見への影　寿扇
欠け初る月も出かゝる桜の香　世筝
錦なく花か流れの翁かな　楳麿
東山を近く寄せて花の雲　専室
咲花の寄りまかるや松の青　本二
散てちる家も見えぬ雨の花　三卯丸
茶屋毎に桜枝さして初さくら　柳皐
咲けりとておとなき文花に遠　碩亭
筏士や棗に付し花の雲　二巣

古く成までもらしくやしら花の暁　晴雲
花守や古き絹着て手に流を振　素青
花見ちとむしろ取らるゝ夕の雨　流柳
宿るよしや花の上行鳥の聲　書暁
うかれくる人影まれ夕まくれ　稼炭
田楽畑も蛙入濟て花さかり　桃義
花衣中よ思ひの月秋の部　蓼窗
花の雨残人の心よ落雲　羽前　未雄
陳る木葉多して静な桜哉　可有

居まハりて穏業ゝ行や花の雲　暁山

羽陵

花の間や夜ゝの前しむ餅おとゝ　三枝

橋ゑ業にて放公ある花さこの堂　梧風

上京乃あれ吹とりなまみ花の中　用和

との山路花を増て夕べのほとり　鼎池

初花や尾上に雲業さくら交　弄山

人去年の川辞のふりや餅の花　素山

織機に似たき時守りて雨乃音　知耕

人の業まき念はしひらけて宵僅に　試泉

雨ふりて筆管の一つのやうに花見かな　筱山

菜へしき日の出のしらや花の雲　时庸

新藤や明まで月も曙のまゝ　松霰

牢の名所業能桜あまりは花まつり　花墻

陸中

橋いま継しく降らぬ四月の花の雲　石洸

婦過ぐる宴をこのまゝりや一生桜　米賀

さくらいのり降れやしき雨儀雨　南岳

陸前

月と花人の新みをつくしたり　平渓

新月やとかしもゝ夜ま花の雪　松甫

とりあへず影のおちゆく卯桜　在陸前　喜直

裏おもてあるいて旅りし花の山　岩代　山石

文字摺や昔をしのぶ里さくら　松声

月にまで見えて花残陰に織　東五

弥出せ人の以字までも見る花　金珠

家の世話無く花見の旅に　実桃

一本乃桜にさし若葉の達　自有

越さくと風のふくらむ桜かな　遊海

花の戸や奥に素家のあるやまも　松窓

坂ゑ家に鼓あり花明り　東湖

咲くまでそさてくに去る作雑木山　芳村

ぬるまでて吹き切り止まぬ花の雪　波琴

迎と志きり鐘業市寺や花の暮　鯉住

さくらちるとも植えおく限り松の庵　蕉井

見て済した花の暇や桜乃雨　菜露

松風に追はれて居る花見への船　樫淑

若都のやせぬとさくらに向ふ嶺　磐城　扶索

着のまゝて錦に見れの上桜かな　山叟

比雲ちや月秋ありし花の時　伊豆　連水

見へし居て夢へ来る桜の身　上総　一滄

隣開たる雲まて居るさくらかな　遊客　翁瓢

花閉くりともちも浮き流花の雲　沙山

花咲て来る桜そや花も一つのもき　宇山

山里雲世並見んきたる桜さく　素水

道も人を誘出て廣し山桜　石叟

初花を拾ふうかなあやて遅さくら　是且

咲をおくるや打や花を命　精気

焼ときして見る人をちる桜かな　蒹雄

ちる時そひともちし清しや八重桜　呉仙

時雲得てあるくと遅されし　為山

ゆくりなく見しる花も初さくら　等栽

恵桜を花咲いつ侍ひ手那　李池

教林盟社蔵版